

ラオスの子どもに文具を贈ろう会 共同代表

輝いています

# ひと

ます しお ひろ たか  
**増塩 弘隆** さん

## ラオスの子どもたちに光を



「ラオスと日本の懸け橋に」と、増塩さん

**東** 南アジアのインドシナ半島に位置するラオス。近年は経済成長が進んでいるものの、かつてはアジア最貧国の一つで、今でも電気すら通っていない学校もあり、特に教育予算が不足しています。そんなラオスの子どもたちに文具や絵本などを手渡しして届けているのが増塩弘隆さん（65歳・北町3丁目）です。

もともと旅行が好きで、世界40か国以上を訪れた増塩さん。その中でも東南アジアの人々は貧しいながらも親切で礼儀正しい人が多く、いつも楽しく旅ができ、何か自分にできる恩返しはないかと考えていました。転機が訪れたのは定年退職した5年前。元

同僚からの誘いで「ラオスの子どもに文具を贈ろう会」に参加すると、地域の子どもたちや知り合いの教員に呼びかけ、鉛筆やノートなどを集めるほか、募金活動も始めました。また、現地では教科書以外の本と接する機会がないことを知ると、絵本にラオス語の翻訳を貼って届けるように。「日本の物語は大人気なんですよ」と、目を細めます。

そんな増塩さんがラオスで最も衝撃を受けたのが山間部にある小学校の昼休みの光景でした。お弁当のない子どもたちが土産品のミサンガを作り始めたのです。「これには思わず涙が出そうでした」。貧困から抜け出すために教育の重要性を痛感するとともに、日本人にも遠い国の問題と捉えずに、「視野を広く持ち、いっしょに考えてほしい」と、強く思うようになりました。

来月、再びラオスに旅立ちます。10日間の日程で届ける物資はなんと100箱。いつかは日本の子どもたちも連れていきたいですね」と、はつらつと夢を語ります。一人でも多くの笑顔を輝かせるため、地道な活動を続ける増塩さんの挑戦は始まったばかりです。

### 今月の河鍋暁斎記念美術館

# 天才絵師の作品 巖にあり

— No.32 —

この作品は、明治20年（1887）の正月に向けて、その年の干支の亥年にちなんで作られた錦絵です。七福神を源頼朝の「富士の巻狩り」に見立て、大黒天は大きな猪に

逆さに乗って勇猛ぶりを示した武将の仁田四郎忠常として描かれています。大黒天の振る小槌からは大判小判や宝が飛び出しており、なんともめでたい作品です。



現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい  
**河鍋 暁斎**  
天保2年(1831) ~明治22年(1889)



暁斎筆「七福富士之萬喜神」明治19年(1886) 武川清吉板 大判錦絵三枚続

河鍋暁斎記念美術館 1月4日(金)~2月25日(月)  
「亥年の福神画」展  
同時開催「寄贈作品展 第2弾 暁斎と同時代の画家たち」展

開館 = 午前10時~午後4時  
休館 = 木曜日・毎月26日~末日・年末年始  
ところ = 南町4-36-4  
入館料 = 一般600円 中学生~大学生500円  
小学生以下300円  
(20人以上の団体は要予約)  
詳細 = 同館(☎441・9780)



展示会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください

